

令和7年度
常葉大学 地域連携事業
実施報告会

(令和7年 9月 3日)

 常葉大学

目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針	2
地域交流・連携推進事業 概要	4
地域交流・連携推進事業	
令和6年度 採択事業6件	
事業1. スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業	6
事業2. 2つの自治体との連携による日本語教育を通じた 日本人住民の多文化共生意識涵養事業	8
事業3. デザイン思考を活用した共創キャンパスプロジェクト (フジ物産株式会社との連携事業)	10
事業4. 人生100年時代を健やかに生きよう! 常葉オリジナル弁当「TOKOHA デリ」宅配システム構築の試み	12
事業5. 「旬」の農産物を使用したジェラート開発による地域活性化	14
事業6. しづおかの人と自然が響きあう ヒューマン・サウンド・スケープの探究	16

常葉大学・常葉大学短期大学部地域連携・交流推進基本方針

[平成 27 年 12 月 14 日制定]

[令和 6 年 1 月 22 日改定]

1. 地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の 3 つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、学校法人常葉大学の建学の精神である「より高きを目指して～Learning for Life～」が理想とする美しい心をもち、より高い目標に向かってチャレンジし、学び続ける人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

2. 地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
- (3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
- (4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- (5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

3. 地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

- (1) 効果性：本学の 3 つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
- (2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
- (3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
- (4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かれていると認められるもの
- (5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

4. 地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
 - ① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
 - ② 正課内外での地域貢献活動の実施

- ③ 学生の地域での就労促進
 - ④ 卒業生に対する継続的な学習機会の提供
- (2) 地(知)の拠点としての大学の役割・機能発揮
- ① 教育研究成果の情報発信及び成果還元
 - ② 多様な学習機会の提供
 - ③ 社会への提言活動
 - ④ 学生の人的資源の活用
- (3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- ① 共同研究(商品開発等)の実施
 - ② 地域課題解決のための共同事業の実施
 - ③ 起業及びベンチャービジネス等への支援活動
 - ④ 地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援
- (4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成
- ① 実践報告会・シンポジウム等の開催
 - ② 実践事例集の作成・刊行
 - ③ 研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

5. 地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

6. 自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

7. 地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

- (1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。
- (2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。

地域交流・連携推進事業 概要

本事業は、本学の教職員が個人およびグループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して補助をする。

- (1) 事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの
- (2) 本学が主体性をもって実施するもの（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）
- (3) 一過性のイベントや行事ではないこと
- (4) 地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

- (1) 地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (2) 本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業
- (3) 産官学（产学又は官学も含む。）連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (4) その他学長が特に認める事業

交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。

地域交流・連携推進事業

～令和6年度 採択事業6件～

スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業

事業担当者

教育学部生涯学習学科 教授 木宮敬信（代表）、

健康科学部静岡理学療法学科 准教授 栗田泰成、経営学部経営学科 准教授 山田雅敏、

教育学部生涯学習学科 助教 中村真博

目的・概要

本事業は、プロスポーツチームを核とした連携事業である。地域貢献活動を研究・教育に溶け込ませるアクションリサーチの一環として、地域活性化を目的としたスポーツチームとの連携を行う。学生のマンパワーを提供するボランティア派遣ではなく、教員および学生の専門性を活かした、両者が WinWin の関係を築くことが可能となる連携を目指す。学生やチームにとってのメリットに加え、スポンサー企業にとっても、学生とともに活動していく長期インターンシップの侧面を持ちリクルート活動につなげられることや、企業の若手社員研修の侧面を持つことが可能である。本事業は他大学生とのコラボレーションも含まれている。本活動に協力いただいている他大学所属教員の協力で、常葉大学 20 名のほか、静岡大学 3 名、静岡英和学院大学 11 名、静岡県立大学 1 名、静岡産業技術専門学校 2 名の学生が参加した。（他大学の学生経費は自己負担）

事業内容・方法

令和 6 年度は、令和 2 年度から 5 年目の採択となり、これまでの経験を活かして様々な取組を実施した。これまで同様、シーズン開幕前の研修やアイスブレイクに時間をかけ、まずは属性の異なる学生同士のコミュニケーションの促進に努めた。特に、本事業は他大学の学生も参加し、大学間を越えた横のつながりを作ることも大きな目的となっているため、この部分については丁寧に実施した。昨年までは、ホームゲーム 2 節でのイベント実施を基本としていたが、令和 6 年度は複数のホームゲームで連続的なイベント開催や、ホームゲーム外での告知活動等も積極的に導入した。

イベント実施にあたっては、グループプレゼン形式で学生の企画を募り、チーム運営およびスポンサー企業に実現可能性等を含めて評価してもらい、いくつかの企画を採用することとした。なお、学生企画の中には非常に優れたものもあり、本連携事業ではなく、チーム運営の正式事業として採択されたものもあった。採用された企画としては、「ファーストビジットステッカー」「応援ハリセン」「SNS マーケティング」「ラバーバンド」「オリジナルドリンク」である。ホームゲームの際には、学生組織「ベルカレッジ」として必ず大型スクリーンで紹介し活動の認知度を高めた。（活動回数 11 回）

連携先企業：ベルテックス静岡（母体チーム運営会社）、kci（ファーストビジットステッカー作成協力）、ベルメシ（イベントでのオリジナルドリンク開発）、GSA（ハリセン作成協力）



ホームゲームイベント企画



オリジナル応援ハリセンの開発



ファーストビジットステッカーの開発



ニックネームやイラストを書き入れて配布する

事業成果

参加した学生にとっては、他大学の学生との交流や、企業との連携等、貴重な体験学習の場となったと考えている。また、スポーツ興行に関心のある学生にとっては、ホームゲーム運営の様子を学ぶことができ、将来の進路選択に役立てられた。参加学生からは、本事業を通して「社会人に求められる資質能力を学ぶことができた」「興行である以上、営利を求めなくてはならず、制約のある中での商品企画等が勉強になった」「グループ活動の進め方を学んだ」等の感想が寄せられ、概ね当初想定していた成果を上げることができたと考えている。なお、チームはB2リーグにおいて、地区3位でプレイオフに進出、惜しくもB1昇格はできなかったが、過去最高の入場者数、地域貢献活動、売り上げ目標の達成等の基準をクリアし、次年度のB1ライセンスを取得することができた。

今後の展開

令和7年度も同様の内容で行う予定であるが、他大学や企業からの参加希望が増えており、これまで以上の連携活動が期待できる。東静岡駅前のアリーナ建設が具体化していく中で、チームと地域の連携の重要性が増しており、ホームゲーム以外の様々なイベント等の開催が予定されている。また、若者への認知向上に向けたSNS等のマーケティング活動にも連携の需要が高まっており、学生の力が期待されている。これまで以上にアウトプットを意識した取組を進めていきたいと考えている。

2つの自治体との連携による日本語教育を通じた日本人住民の多文化共生意識涵養事業

事業担当者

外国語学部グローバルコミュニケーション学科 教授 坂本勝信（代表）、教授 谷誠司、
経営学部経営学科 教授 山下浩一

目的・概要

本事業では、公益財団法人浜松国際交流協会（以下「HICE」）及び、焼津市市民協働課との連携にて、①生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと、②常葉大学学生の多文化共生意識を涵養すること、③多文化共生社会実現に向け、日本人住民の意識向上を図ることの、3点の目的を掲げた。以下は、主な実施内容である。

- 1) HICE の天竜日本語教室の学習者を対象に月に1回オンライン日本語教育を行う（計10回）。
- 2) 一般の日本人住民を前にした、1) の成果発表会を2025年2月に実施する。
- 3) 天竜日本語教室の学習者が外国語学部の授業において日本での生活体験などについて講義する。
- 4) 焼津市の地域日本語教室に日本語サポーターとして関わり、学習者の日本語習得のサポートを行う。

事業内容・方法



ポスター発表（交流会）の様子

オンライン天竜日本語教室では、好きなこと・もの・場所・人などを語る「Show & Tell」をメイン内容とし、大学生が学習者の思いやエピソードなどを引き出し、文章化するサポートをするとともに、2) の成果発表会におけるスピーチやポスター発表（交流会）を成功に導くための裏方の役割を担った。たとえば、スピーチ用パワーポイントを作成したりポスター発表（交流会）時に日本人住民との対話に生かせる相槌や聞き返し、確認

の表現を導入・練習したりした。また、成果発表会は、前年度に続き、全ての学習者と大学生が初めて顔を合わせており、同年代の者同士が真の交流をする機会となった。当日は、外国語である日本語のシャワーを浴び続ける学習者の大変さを来場者に理解してもらうべく、大学生による外國語でのスピーチ（英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国語）も行われた。スクリーンには外国語の原稿にやさしい日本語が添えられたが、来場する日本人住民の多文化共生意識を涵養することが目的であった。



ポスター発表（交流会）終了後の振り返り

また、昨年度に続き、天竜日本語教室の学習者アイディル氏に外国語学部の授業に登壇いただき、自分の国や技能実習生・特定技能としての生活、宗教のことなどを語ってもらったほか、本事業参加者である大学生に授業内で活動報告をしてもらうなどした。

さらに、焼津市市民協働課では、静岡県が推奨する「対話交流型」の日本語教室を開催している。本学の学生は日本語サポーターとして、学習者と日常生活に密着したテーマでリアルな内容を伝え合い、同じ地域に住む生活者として対等な関係でお互いを理解し学び合った。

事業成果

今年度、1) 2) の事業に、本学の学生 20 名（従来の 2 倍）が継続的に取り組み、3) の天竜日本語教室の学習者の講義は約 120 名の外国語学部の学生が聴講した。また、4) には計 14 名の学生が参加した。1) 2) 4) に大学生が関わることによって、学習者の日本語力向上や日本人の考え方を知ること、また、同世代の日本人住民との交流を通して居場所創りに一定の役割を果たし、日本社会へのスムーズな適応に貢献したと思われる。同時に、本学学生にとっても地域日本語教育の実際を知るとともに、地域在住外国人との接点を持つ貴重な機会となった。



成果発表会（終了後の集合写真）

今年度のオンライン授業でも、相槌や聞き返し、確認など場面や相手に応じて適切に使い分ける必要がある日本語表現の養成に力を入れたが、その成果はポスター発表（交流会）時の来場者とのコミュニケーションにて発揮された。同時に、大学生も誤用へのフィードバック実践の経験を得たり社会言語能力育成の重要さを知ったり協働の大切さに気付いたりする様子が、事業後の振り返りレポートなどから読み取れた。また、2) の成果発表会来場者対象のアンケートには、日本における学習者の経験や考え方方が知れたことに対する喜び、また、短期間で見事にスピーチができるまでに日本語力を高めたことへの尊敬の念が伝わる記述が多く観察された。3) の講義後の感想シートには日本で技能実習生・特定技能として働き、生活するアイディル氏の生の声を、そして、日本語学習者としてのリアルな体験談を聞くことができ、外国人住民を身近に感じる様子や、外国語を学ぶ者として大変な刺激を受ける様子がうかがえた。4) の事業後の参加者へのインタビューでは、「言語が違うと理解しえない点で変な先入観、偏見を持つてしまうと思うので、一度触れ合ってみて同じ人間、同じ分かり合える仲だと知る機会があったのは良かった」など、「知ること」の重要さへの気づきが語られるなどした。

今後の展開

令和 7 年度も「日本語教育に係る対話と交流を通じた若者世代日本人住民の多文化共生意識涵養事業」というテーマで本学の地域交流連携推進事業に採択され、7 月からオンラインによる教室 (HICE) 及び、8 月から対面による日本語サポーターとしての参加（焼津）が始まる。主に日本語教育を学ぶ外国語学部の学生に声をかけ、前者は 17 名が、後者は 6 名が本活動に取り組むことが決まっている。

3

デザイン思考を活用した共創キャンパスプロジェクト (フジ物産株式会社との連携事業)

事業担当者

造形学部造形学科 准教授 村井貴（代表）、教授 安武伸朗、教授 土屋和男

目的・概要

本事業は、デザイン思考を活用し、学生と企業が連携して地域社会との共創を目指すことを目的とする。学生自身が企業の魅力や地域の潜在的な可能性を主体的に発見し、それを基に新たな価値を創出するプロセスを重視する。これにより、単なるアイデア発想にとどまらず、デザイン思考の実践を通じて社会人基礎力を養成することを狙いとしている。過去にも、商店会や児童向け施設を対象とした類似の取り組みを行ってきた。しかし、地域に密着した活動である一方で、社会人基礎力の醸成という観点では課題を残していた。特に、学生が将来の「働く姿」を具体的にイメージする機会が限定的であった点が問題である。今回の事業では、対象を地域の一般企業に設定することで、よりビジネスの現場に近い課題解決型の学習を実現する。企業が抱える実際の課題やニーズを理解し、それに対して学生が主体的に解決策を提案する過程を通じて、社会人基礎力を早期に養成するとともに、地域産業との結びつきを深め、価値創出に寄与することを目指す。

事業内容・方法

事業代表者は、令和3年度からデザイン思考を取り入れた授業実践を継続してきた。令和6年度は、静岡市清水区に本社を置くフジ物産株式会社と連携し、「企業×地域×学生」という三者の視点を統合した取り組みを実施する計画である。学生は、デザイン思考のプロセスを活用して、フジ物産が抱える潜在的な課題を主体的に発見・分析し、解決策を検討する。検討したアイデアは、フジ物産の社員からのフィードバックを受けて磨き上げ、現実性や実行性を高めた最終プランへと発展させる。最終的には、このプランを地域社会に還元する形でイベントを実践し、単なる学内発表に留まらないアウトプットを目指す。これにより、学生は実社会の課題解決に参画する経験を通じて、デザイン思考の実践力を高めるとともに、社会人基礎力や地域貢献意識を醸成することを狙いとする。また、企業にとっても、学生の自由な発想や新鮮な視点を取り入れることで自社の課題解決に資するとともに、地域社会や教育機関との連携を深め、将来的な人材育成への貢献を果たす機会となる。こうした三者の協働を通じて、地域の価値創出と持続可能な発展を目指す取り組みである。

事業成果

学生は、デザイン思考の手法を用いてフジ物産の課題を深掘りし、実践的な解決策を提案・実行する

経験を積んだ。成果としては、フジ物産本社を訪問し、社員へのヒアリングを通じて同社の課題を把握した上で、スポンサーを務めるプロバスケットボールチーム「ベルテックス静岡」のホームゲームにおける「ベルテックススマーケット」でPRブースを出展する計画を立案・実施した。具体的な取り組みは以下の通りである。

- ① フジ物産が扱うマグロの加工時に廃棄されていた尾っぽ部分に着目し、新たな価値を見出した「尾っぽパン」の商品開発と販売を行った（図1）。
- ② 来場者がバスケットボール好きであることに着目し、フリースローを体験しながらクイズで企業理解を深める「クイズでフリースロー」を企画した（図2）。
- ③ ベルテックス静岡のマスコットキャラクター「ベルティ」と連動した缶バッジなどの応援グッズを制作し、フジ物産の企業紹介を兼ねたメッセージボードをデザインした（図3）。



図1 尾っぽパン



図2 クイズでフリースロー



図3 応援グッズ

これらの活動を通じ、学生は企業の潜在的な課題を浮き彫りにするとともに、現場での実施を通じて改善策を具体化するプロセスを体験した。また、地域企業との協働を通じて社会人基礎力を養成するとともに、地域社会とのつながりを強化する成果を上げた。本事業は、学生にとってインターンシップ的要素を含む実践的な学びの場であるとともに、フジ物産にとっても若年層の視点を取り入れた新たな企業価値の発見や地域社会への発信強化を可能にする機会となった。今後もこのような「企業×地域×学生」の共創を通じて、地域産業の振興と人材育成を同時に推進する取り組みを継続・発展させる必要があると考える。

今後の展開

令和7年度も引き続きフジ物産との連携を進めるべく、現在プロジェクトの準備を進めている。今年度は、同社が毎年夏頃に本社内で実施している地域還元イベント「ファミリーフェスティバル」を対象とし、デザイン思考を用いてその内容をブラッシュアップする計画である。具体的には、学生がイベントの課題を抽出し、改善策を提案する。提案内容はフジ物産との協議を経て具体化し、最終的にはマーケット静岡のイベントスペースを活用し、学生主体で地域住民を対象としたイベントを開催する予定である。

人生100年時代を健やかに生きよう！常葉オリジナル弁当「TOKOHA デリ」宅配システム構築の試み

事業担当者

健康プロデュース学部健康栄養学科 教授 池谷昌枝（代表）、
教授 三浦綾子、助手 鈴木知子

目的・概要

我が国的重要課題である「健康寿命延伸」は、食や栄養からアプローチすることが可能であり、その方法を考えることは健康栄養学科及び管理栄養士養成校の責務とも考える。本研究ではこの点に着目し、地域の健康増進を目指すための取り組みを目指した。具体的には、健康寿命延伸に寄与する宅配弁当システムの構築であり、考案する弁当の理念は臨床栄養学の視点に基づく‘3要素’に重点を置いた。3要素とは、①高たんぱく質、②抗酸化、③抗炎症であり、老化抑制及び疾病予防に有効と考えられているものである。そして、本研究のオリジナリティは、単に弁当を食糧として提供するのではなく、在宅における高齢者に対して管理栄養士が直接出向き、栄養問題の抽出と栄養教育を行うという付加価値を付けた取り組みである。つまり、弁当の概念を食糧から教育ツールとしてパラダイムシフトさせ、在宅高齢者の健康を支援する地域包括的なアプローチへと発展させるための試行策として位置づけた。併せて、将来的には‘常葉大学のオリジナル弁当’として地域貢献、本学をアピールするためのツールとしても活用できるよう検討していきたい。

事業内容・方法

事業内容と方法を以下の順で報告する。

- 1)連携企業と活用食材：連携企業は、①やまと興業株式会社、②株式会社発芽玄米、③森島農園とした。本弁当では各企業のオリジナル商品を活用して3要素に寄与させた。各商品は、①粉末緑茶とカテキン入りみかんゼリー、②玄米フレークと玄米粉、③小松菜パウダー等とした。
- 2)弁当考案：1食あたりの栄養量基準は600kcal、たんぱく質25g、塩分2g、食物繊維7gとし、さらに弁当をA,B,Cの3区画に分割した栄養量も設定した。A区画は主食とたんぱく質源、B区画はたんぱく源おかず、C区画はスイーツとし、酸化や炎症抑制のために高温加熱を避けた調理法、ビタミンやミネラル、ポリフェノール、食物繊維強化のために緑黄色野菜や果物を活用し、20種類の弁当を考案した。
- 3)調理：本学調理室での衛生管理に基づく調理を行い、冷凍対応の使い捨て弁当箱を用いた。調理後すぐに冷凍し、冷凍及びレンジアップによる品質、物性、味、食感等の劣化を確認した。
- 4)実務経験者及び学生アルバイトの活用：高齢者在宅管理の実務経験者を社会人アルバイトとして採用し、訪問時の注意点や配慮への勉強会を開催した。健康栄養学科から学生アルバイトも採用し、調理補助と弁当の試食会の担当とした。試食会には連携企業担当者も参加し、各社商品を活用した弁当について

て、味や食感、冷凍及びレンジアップによる劣化などの意見交換も行った。

5) 宅配：2件の高齢者宅への冷凍弁当の宅配を行った。今回の対象者は研究代表者が過去に実施した栄養教室の受講者であり、本研究への説明による同意が得られた者とした。宅配時には池谷ゼミの学生も同行し、訪問栄養指導の教育としても活用した。本研究のオリジナリティとして前述したように、管理栄養士の訪問による付加価値をつけるため、弁当の配送だけでなく握力や体脂肪などの身体計測、高齢者からの質問に答える栄養相談、健康寿命延伸に効果的な食事摂取についての栄養教育も行った。

6) 問題分析と課題の検討：本研究で考案した弁当の献立と試食を経て、味や見た目、冷凍からレンジアップによる品質変化、食べやすさなどの点から問題分析と課題検討を行った。また、訪問により高齢者が抱える食の現状や低栄養状態、身体活動に関する問題点も明らかとなり、今後の課題を検討した。

事業成果

本研究では、連携企業の商品を活用して高たんぱく質、抗酸化、抗炎症の3要素を満たした冷凍弁当を20種類考案した。宅配は2件×2回ずつ訪問し、弁当の提供と栄養相談や栄養教育、身体計測を行った。弁当は良好に喫食され、必要栄養量の理解や栄養補給の効果を実感したという意見が得られた。味付けについても減塩の重要性と美味しさを認識していただくことができた。身体面では1例において、握力が初回よりも2回目で向上したことは有意義な成果だと感じた。問題分析の結果、栄養講座の参加経験があり自立生活ができる場合でも、食事の必要量や食材、料理の知識が想像以上に少なく低栄養の現状があることが明白となった。これにより、在宅配送と管理栄養士の訪問の重要性が認識できた。今後の課題として、弁当のバリエーションを増やすこと、冷凍宅配システムの検討、管理栄養士の訪問時栄養指導の質向上などが考えられた。本研究の取り組みは更に継続し、管理栄養士による地域栄養支援対策についての展望を検討していくことが必要であると実感した。

今後の展開

今後は、高齢者の摂食嚥下機能改善を視野にいれた弁当の考案、訪問時における栄養情報の啓蒙と教育、行動変容へのアプローチ、配送システムについての検討が必要である。これに対して、令和7年度では代表者が個人研究として継続、発展させた研究を行うこととしている。そして、池谷ゼミでは弁当の考案と在宅栄養指導についての学生教育も行っている。連携企業の商品については、健康寿命延伸への寄与効果が高いと考えるため、今後も更なる有効な活用方法を検討中である。

＜本研究で考案した弁当のメニュー（A区画）と画像＞



カテゴリーA 献立名	
小松菜と鮭の和風ごはん	コーンとチーズのトマトご飯
ひき肉とブルーンのケチャップご飯	南瓜と豚肉の山椒ご飯
青梗菜とひき肉、かぼちゃのごはん	パプリカと豚ひき肉の味噌ご飯
さつま芋と豚肉の和風ご飯	ひき肉とブルーベリの甘酢ご飯
ほうれん草とチーズのご飯	キウイと示さばの甘酒ご飯
鰯とソソの漬物ご飯	さつま芋と鶏肉のきのこご飯
プロッコリーとツナのケチャップライス	小松菜と桜エビの甘酒ご飯
キャベツとひき肉の味噌ご飯	パインアップルの酢豚風ご飯
ピーマンと油揚げの和風ご飯	マスタードチキンご飯
バーチキンカレーご飯	小豆と豚肉のちまき風ご飯
トロピカルご飯	小松菜の焼うどん

「旬」の農産物を使用したジェラート開発による地域活性化

事業担当者

健康プロデュース学部健康栄養学科 准教授 杉浦千佳子（代表）、特任准教授 児山左弓、浜松地域貢献課 松岡孝江

目的・概要

旬の農産物は特に香りや旨味が豊かで栄養価が高いことが知られており、その栄養成分（ビタミン、ミネラル、食物繊維、ポリフェノール）は疾病リスクの低減効果が期待されている。また、旬の農産物は収穫量が増加し、輸送コストや保存コストが抑えられ、新鮮で安価に購入が可能である。さらに、産地によっても旬が異なるため、地元で収穫された新鮮な農産物の需要が増えることで、農家はより多くの収穫を目指し、農産物を利用した商品開発が地元経済の循環を生み、地域の持続可能性を向上につながると考えられる。

ジェラートは、加熱せず素材を攪拌して凍らせるため、栄養成分を壊さず保持する利点がある。さらに、アイスクリームに比べて乳脂肪分が少なく低カロリーで素材の味を濃厚に感じることができることが特徴である。ジェラート製造には職人の技術と素材選びが重要となるため、袋井市のジェラート専門店「Migela」の協力のもと、旬の農産物活用したジェラート開発を進める。

本事業では、ジェラートを通じて旬の野菜や果物の美味しさを広く認知してもらうことで、食の大切さと健康意識の向上を目指したい。また、学生が地域課題を理解しながら専門性を活かした商品開発を行うことで、地域特産品への関心を高めることを目的とする。これらの活動により、地産地消による食品ロスの低減や地域活性化につながることを期待する。

事業内容・方法

1. 「旬」の地元農産物を使用したジェラートの開発

- 1) ジェラート専門店「Migela」によるジェラート講座の実施
- 2) ジェラートに使用する「旬」の農産物の選定と試作



図1 ジェラート講座の様子

浜松パワーフードに認定されている農産物を中心に、「旬」の果物や野菜を調査し、ジェラートに使用する素材との組み合わせを検討しながら、試作を繰り返し、ジェラート試作品の完成を目指した。

2. 開発商品のアンケート調査の実施

一般の方を対象にジェラート試食とアンケート調査を実施した。

- 1) 令和6年11月24日（日）浜松市主催まちなか文化祭「いろどり」、回答人数48名
 - 2) 令和7年3月2日（日）浜松市北行政センター主催はままつ北フェスタ2025、回答人数166名
3. 「Migela」の製造技術によるジェラートの試作と商品化の決定

事業成果

1. 「旬」の地元農産物を使用したジェラートの開発

「Migela」代表の長谷川さんを大学へ招き、ジェラートの基本や作成における注意点などの知識や技術を学びながら、大学の近隣で栽培されているにんじん、レモン、柿、みかん、ブルーベリーなどを使用して試作会を実施した。色々な野菜や果物を使って、学生のアイデアを生かした試作と意見交換を行う中、栄養価の高い「モリンガ」を卒業生が浜松で栽培しているという情報を知り、取り入れることにした。また、地元に規格外のブルーベリーがあることがわかり、これも試作の候補とした。そして、「Migela」からジェラート製造機をお借りして、オリジナルジェラート5種類〔ブルーベリー50%・ブルーベリー30%・モリンガ・柿・ショウガと柚子〕を開発した。ジェラート開発には健康プロデュース学部健康栄養学科の2年生と3年生が協力し、出来る限り添加物を加えず素材を生かした健康と安全性に重視したレシピを考案した。試作に使用した地元農産物のうち、浜松パワーフードに認定されているまほろばブルーベリー園のブルーベリーとオキメモが栽培している「モリンガ」を提供してもらえた。学生は、「旬」の地元農産物の栄養成分とその効能について学ぶ良い機会となった。

2. 開発商品のアンケート調査の実施

アンケート調査では、多くの地域住民に協力を得て、幅広い年齢層の方にジェラートの試食して頂いた。参加者は、常葉大学健康栄養学科の学生が考案したジェラートに興味を持ち、地元農産物を使用したジェラートに関心を示してくれた。特に、ブルーベリーを使用したジェラートは、クリーム感が50%はさっぱりしている、30%は濃厚であると、ブルーベリー含有量の違いで全く味が異なる商品に仕上がった。好みが分かれるが、どちらも良い評価であった。モリンガはそのままの粉末では特徴のない味であったが、きなこを組み合わせることで、幅広い年齢層においしいと受け入れられた。「モリンガ」を知らない方も多く、浜松で生産されていることに関心を持って頂いた。これらの機会を通じて、健康栄養学科の特色を生かした健康・安心・安全な商品作りにも共感を得られたと感じた。今後、ジェラートを通じて地元農産物への関心や果物・野菜摂取の重要性を知るきっかけになることを期待したい。

3. 「Migela」の製造技術によるジェラートの試作と商品化の決定

ジェラート試作品5種類について意見交換を行い、アンケート調査で選ばれたモリンガ（1位）、ブルーベリー50%（2位）、ブルーベリー30%（3位）の3種の商品化を決定した。このブルーベリーとモリンガはともに、抗酸化作用が強く、健康に良い効能が多く認められている。特に、ブルーベリーの冷凍処理により、果皮に含まれる抗酸化成分の濃度が上昇することがDPPH分析によって確認された。このことから、「旬」の素材を使用したジェラートが、健康価値を高める食品として有用であると考えられる。製造は、「Migela」に依頼し、学生考案のレシピ通り作成できることとなった。価格は原材料費を見込み「Migela」販売価格1カップ125mL400円（税込み）に合わせることとした。学生は、これまで学んだ栄養学の知識を商品化に生かす実践的な経験を積み、多くの協力者との連携により、商品開発や問題解決の方法を様々な視点から学ぶ機会を得ることができた。

今後の展開

本事業において開発したオリジナルジェラートは、常葉大学ブランドと「Migela」の共同開発商品として、大学のイベントの際に販売を行い、持続性のある商品の利用と促進を目指したいと考えている。



図2 カップ入りジェラート

しづおかの人と自然が響きあう ヒューマン・サウンド・スケープの探究

事業担当者

短期大学部保育科 教授 遠藤知里（代表）、

講師 木下藍、講師 馬飼野陽美、助教 小島菜緒子、准教授 田村元延、

短期大学部音楽科 教授 井上幸子、講師 森広樹、短期大学部日本語日本文学科 准教授 宮本淳子

目的・概要

過去2年間の取り組み実績を踏まえ、静岡の風土の中で「ひとのつながりが生み出す響き」の探究を目的として、短期大学部の3学科の特色と「ひとのつながり」を重視した地域貢献活動を展開した。令和6年度は、多様な年齢層（たとえば乳幼児、高齢者）を対象とした、「ヒューマン・サウンド・スケープ（ひとのつながりが生み出す響き）」を共通項とする教材開発を行い、複数のワークショップを企画・実施した。短大生が参加することで、地域の自然環境や文化的環境への理解を深めるとともに、自らの専攻分野と地域社会との結びつきに気づく機会とした。

事業内容・方法

1. こどものあそびば（令和6年5月13日）

保育科授業「保育内容（表現）の指導法」の受講生37名が子どもの遊びコーナーを提供し、附属幼稚園児を含む55名の幼児が参加した。

2. とことこサマーフェスティバル（令和6年7月17日）

保育科授業「乳児保育演習C/D」受講生67名が遊びコーナーを出展し、約20組の親子が参加した。

3. みんなで愉しむ 物語の世界（令和6年8月22日）

特別養護老人ホーム蜂ヶ谷園（静岡市清水区）で、日本語日本文学科の学生6名と宮本が参加し、桃太郎の物語をモチーフとしたレクリエーション活動を実施し、ショートステイとデイサービスを利用する高齢者が活動に参加した。

4. 夏休み 絵本とおはなし（令和6年8月30日延期・別日程で実施）

城東子育て支援センターで、「子どものフィールドワーク」受講生3名が、絵本の読み聞かせを行い、子育て支援センターを利用する親子が参加した。

5. しぜんのひびきをきこうⅠ～プラネタリウムでコンサート～（令和6年9月14日～15日）

静岡県立朝霧野外活動センターで、保育科学生8名が自然体験活動（キャンプ）の指導を、音楽科学生2名がプラネタリウムでの演奏を行い、年長児と小学校1年生児童計20名が参加した。また、令和4年度～5年度常葉大学共同研究の成果である動画作品「富嶽幻影」を、併せて上映した。



写真1 こどものあそびば

6. トコトコのもり トコたんのうんどうかい（令和6年10月17日）

トコトコのもり グラグランド（令和6年10月28日）

保育科学生が、保育学部学生と連携し、草薙キャンパスで幼児を対象とした運動あそび等のプログラムを提供した。両日合わせて、保育科生24名、保育学部生23名が参加し、有度幼稚園と若竹こどもの森の園児52名が参加した。

7. 親子ワークショップ@了善寺（令和6年11月23日）

了善寺（藤枝市）を会場に、「静かな音をききながらこころとからだを感じてみよう」を主題として、花岡清美氏（音楽療法士）の協力の下、ワークショップを行った。保育科生3名と、5家族17名（未就園児から小学生とその親）が参加した。

8. こどもかぜのこまつり（令和7年1月21日）

保育科授業「乳児保育演習A/B」受講生計66名が遊びコーナーを出展し、親子15組とあおぞらキンダーガーデンの園児20名が参加した。

9. しぜんのひびきをきこうⅡ～0さいからのコンサート～（令和7年2月10日）

プロ演奏家（静岡低音俱楽部）の協力の下、日本語日本文学科・保育科学生計10名がことばあそび、絵本読み聞かせ、音楽プログラム、演奏を行い、大人20名と子ども23名（小規模保育所なのはなガーデン、あおいガーデンの園児12名を含む）が参加した。

事業成果

本事業における学生の経験は、短期大学部の学習成果である①知識とその活用、②自律力、③豊かな人間性、④社会的な行動力、⑤コミュニケーション力と関連づけることができる。これらは建学の精神「Learning for Life」を踏まえた「知徳兼備」「未来志向」「地域貢献」にも連なるものであり、短大の学びの中において、これら一連の地域交流活動を新たに価値づけることができた。

活動の詳細は、下記を参照されたい。

- 木下藍、花岡清美(2025) 親子ワークショップ@了善寺の実践報告「しずかな音をききながら、『からだ』と『こころ』を感じてみよう」. 保育と実践(20), 81-87.
- 遠藤知里、井上幸子、宮本淳子、木下藍、森広樹、小島菜緒子、馬飼野陽美、田村元延(2024) 2024年度地域交流・連携推進事業報告 短期大学部3学科の連携による「トコたん地域交流」: しずおかの人と自然が響きあう ヒューマン・サウンド・スケープの探究. 常葉大学短期大学部紀要(55), 29-43.

動画 しぜんのひびきをきこうⅠ～プラネタリウムでコンサート～

2024/9/14 プラネタリウムコンサート 静岡県立朝霧野外活動センター

03:46 L. ハーライン/日音編《ピノキオ～星に願いを》

06:38 菅野よう子/Zoe編《花は咲く》

12:45 フランス童謡/谷口英治編《クラリネットこわしちゃった》

16:08 久石譲/鈴木雅史編《ジブリ・メドレー》

https://youtu.be/aL5sRn_guzU



今後の展開

令和6年度は草薙キャンパスを中心とした活動により回数を増したことで、実際に人と人が出会い、心触れ合う機会を数多く創出することができた。令和7年度は、対象とする年齢層を高校生年代にもひろげ、引き続き3学科の特色と教員の専門性を活かした地域交流活動として継続していきたい。

※記載されている教員の職位及び学部・学科の名称は令和6年度のものです。

※令和7年4月より、以下の学科の名称を変更しました。

旧	新
健康プロデュース学部 こども健康学科	健康プロデュース学部 保育健康学科
健康プロデュース学部 心身マネジメント学科	健康プロデュース学部 スポーツ健康学科

■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1
TEL. 054-297-6100(代表)
教育学部 外国語学部 経営学部
社会環境学部 保育学部
大学院 国際言語文化研究科
学校教育研究科
環境防災研究科
短期大学部 日本語日本文学科 保育科

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1
TEL. 054-263-1125(代表)
造形学部
短期大学部 音楽科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30
TEL. 054-297-3200(代表)
法学部 健康科学部

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市浜名区都田町 1230
TEL. 053-428-3511(代表)
経営学部 健康プロデュース学部
保健医療学部
大学院 健康科学研究科



常葉大学
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター
発行日：令和7年9月3日
URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>